

くすし 鑿は「病ヲ治スル工也」

「鑿」＝「醫」はくすりを調合する人

中国・漢代の歴史書『漢書』では、医家は「方技」、すなわち人民の生命を保つ長命術などの職人と考えられており、その考え方は日本へも伝わりました。

源順が著した平安時代の百科辞典『倭名類聚鈔』(922-931頃)の「工商類」の中には、医師とは「鑿」＝「醫(くすし)」のことであり、「治病工(＝病気を治療する職人)なり」と記されています。

医師を「くすし」と呼ぶのは、処方指示された薬を調合する役割が医師だったからです。「くすし」の元となる言葉「くすり」には、「[何かを]つける」という意味や、「奇しき(珍しい)術」という意味、「草煎(くさいり)」という意味、和し(なぐし)という言葉に由来するなど諸説があります。

安土桃山時代には、医師・曲直瀬道三が、著書『切紙』で医師を「医工」と称して、その心得を述べています。この考えは江戸時代まで続きました。



『倭名類聚鈔』 源順編 <元和3年(1617)の刊行書>
平安時代中期に源順により編纂された辞典で、天文学や医学、器物などの分類ごとに事物を説明している。

鑿くすし
説文に云鑿くすしヲ
反伊作鑿くすし
須之和名久
治くすし病工也